

意外と
知らない
?!

マイナー野菜の栽培とその利用

27

ハーブ編

民間薬として親しまれてきた ジャーマンカモミール

キク科シカグク属の1年草で、ドイツカミツレという別名があります。地中海沿岸地方原産で、ヨーロッパや小アジアなどに分布し、北米やオーストラリアなどでは帰化植物となっています。ヨーロッパでは最もポピュラーなハーブの一つで、古くから薬用植物として利用されています。

カモミールといえば本種を意味しますが、よく似た植物にローマンカモミールがあるので、それと区別するためジャーマンカモミールと呼ばれています。ローマンカモミールはキク科ローマカミツレ属の多年草です。ローマンカモミールは初夏に咲き、ジャーマンカモミールは早春または秋に咲きます。また、ローマンカモミールは花だけでなく、茎葉にも強い芳香があります。ジャーマンカモミールは花にだけ芳香があるのが特徴です。

秋まきと春まきが可能ですが、耐寒性があるので秋まきの方が生育はよくなります。草丈60cm内外で、1株から10本程度分枝し、開花期になるとキクと同じような頭状花序をつけます。花はローマン

カモミールより小さいがたくさん白い花を咲かせます。黄色の筒状花を中心に、周辺に10〜20の舌状花をつけ、筒状花の開花時には、周辺の舌状花は垂れ下がります。花床の内部はローマンカモミールとは異なり、中空となります。

栽培は容易で、排水・日当たりのよい土壌を好みます。発芽最適温度の20〜25℃では6〜8日くらいで発芽し、好光性種子のため照明下で発芽が促進されます。栽培は風通しのよいところがよく、耐暑性は弱いので注意します。初期生育はやや遅く、早春に生育を始め、多くの分枝を出して花を咲かせます。播種のほかには実生、挿し木、株分けなどで繁殖しますが生育期間が短いので育苗するより種子の直まきが適しています。病害虫の心配はほとんどありません。花を収穫する際、筒状花の最頂部分のものが開花し、舌状花が下方に垂れ下がっているものを収穫します。花は一斉に開花しないので、開花したものから順次つみとってください。花を乾燥させたものはハーブ、または民間薬として利用されます。花は生でも乾燥したもので、リンゴの果実に似た香気があります。また、花には精油も含まれ、ハーブあるいは薬用

植物として利用されます。民間薬として消炎、発汗、くふう駆風に煎薬として、あるいは入浴剤として利用されています。

カモミールの利用法としては、ガーデニングでの観賞用やコンパニオンプランツとしてトマトやキヤベツ、タマネギなどと混植すると、害虫の被害を軽減する作用が知られています。そのほかの活用方法として、切り花や染料としての利用などがあります。また、調理やハーブティーには花を利用しますが、茎葉は利用しません。生食して味を楽しむより、ハーブティーやポプリなど香りを楽しむのが特徴的なハーブです。



↑開花してきた
ジャーマンカ
モミール。



↑生育中のジャーマンカモミール。



↑カモミールティー。



↑乾燥したカモミールの花。

京都府立大学大学院 名誉教授
ふじめ ゆきひろ
藤目 幸擴

昭和44年京都大学大学院農学研究科修了、57年に農学博士。平成11年より京都府立大学大学院農学研究科教授、17年には同大学農学部附属農場長も兼任。平成20年3月に退職。現在、NPO京の園芸福祉研究会理事、(株)セントラルフルーツ顧問・園芸研究所所長(丹波農場)。「農業技術体系野菜編」第6巻「ブロッコリー」(農文協、共著)をはじめ、著書多数。16年1月〜17年12月には、「園芸新知識・野菜号」で「今さら聞けない野菜発育のメカニズム」を連載。

